様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年６月４日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２０１２～２０１３
課題番号：２３７２０３５０

研究課題名（和文）２０世紀前半エジプトにおけるスーフィー教団とパン＝イスラーム主義

研究課題名（英文）Sufi Orders and Pan-Islamism in early Twentieth Century Egypt

研究代表者
高橋　圭（TAKAHASHI KEI）
上智大学・イスラーム研究センター・研究員
研究者番号：６０４４９０８０

研究成果の概要（和文）：本研究は、パン＝イスラーム主義の展開を基軸に据えながら、20 世紀前半のエジプトにおけるスーフィー教団と当時の政治社会思想・運動との関わりを実証的に解明することを目的とするものである。その事例として、スーフィーが関与した二つの団体に焦点を当て、その組織や活動の実態解明に取り組んだ。その結果、この時期のスーフィーたちの政治社会運動への参加の具体的な様相を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the relationship between Sufi orders and socio-political movements in early twentieth century Egypt, by paying special attention to the pan-Islamic trends prevalent in this period. As the cases to illustrate Sufis' involvement in socio-political movements, I focused on two pan-Islamic organizations in which some prominent Sufis were involved. A close analysis on the organizational significance and historical background that support the founding and activities of these two organizations reveals the way Sufis of this period actively participated in these movements.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：イスラーム、スーフィズム、スーフィー教団、タリーカ、パン＝イスラーム主義
エジプト、東洋主義

１．研究開始当初の背景

前近代のイスラーム社会において民衆の生活世界に深く根付き、重要な社会的役割を果たしきたスーフィー教団は、一般に近代以降の急激な社会変容の中でその伝統的な役割を喪失し、徐々に周縁化されていったとされている。こうした状況の中、エジプトでは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてスーフィー教団の改革が進められ、近代社会におけるその生き残りが図られることになった。

この改革運動では、それまで教団が担ってきた神秘的・祝祭的な側面が捨象される一方で、教団を当時の政治・社会問題の解決に直接貢献し得る―つまり社会の要求に応える―組織へと変革させることが目指された。そして 20 世紀に入ると、何人かの改革派スーフィーたちが政治・社会運動に積極的に関与する例が見られるようになる。

中でも注目すべきは、スーフィーたちとパン＝イスラーム主義運動との関わりであり、1920 年代にはスーフィーたちが主体となり、「東洋連盟」と「ナイル渓谷・カリフ再興団体」という 2 つのパン＝イスラーム主義団体が結成されていた事実を確認することができる。

パン＝イスラーム主義は、19 世紀末から

20 世紀初頭にかけて盛り上がりを見せた政治運動であり、その後も 20 世紀を通じて近代政治思想の潮流の一つとして存続し、例えば 1969 年に創立されたイスラーム諸国会議機構の理念として体現され、あるいは 1930 年代頃から台頭するイスラーム政治運動にも受け継がれているとされる。両団体の存在は、スーフィーがこのような近現代イスラーム思想・運動の重要な一端を担う潮流と密接な関わりを持っていたことを裏付ける事例であり、その実態解明は、従来その「衰退」が強調されてきた近代スーフィー教団理解に大幅な修正を迫るものとなるだろう。

２．研究の目的

本研究の目的は「東洋連盟」と「カリフ再興団体」の実態の解明を通じて、1920 年代におけるスーフィー教団の政治運動への関与のあり方を明らかにすることにある。すなわち、ある教団が、あるいはそのメンバーが団体の活動にどのように関わっていたのかといった点を、一次史料に即してできるだけ具体的に明らかにすることが、本研究で取り組む作業となる。また、両団体を当時の政治的・社会的文脈の中に置いて分析することで、その歴史的意義を考察する。すなわち、両団体の実態を明らかにした上で、パン＝イスラーム主義に立脚したスーフィーたちの活動がこの時期に果たし得た役割や、このような形の活動に見られる革新性を考察する。

３．研究の方法

本研究では、研究テーマに関連する研究文献を網羅的に押さえつつ、「東洋連盟」と「カリフ再興団体」の実態解明につながる一次史料の調査・収集・分析に取り組んだ。

史料の調査・収集は国内での作業が中心となったが、平成 23 年 8 月にはロンドンの大英図書館と国立公文書館で史料調査・収集作業を行い、多くの成果を得ることができた。なお研究計画の段階ではオランダのライデン大学での調査も予定していたが、これは本研究課題開始前の平成 23 年 3 月に調査を行う機会があったため本研究期間中には実施しなかった。無論ライデン大学での調査の成果も本研究成果に反映されている。

以上の作業を通じて入手した主要な史料は以下の通りである。まず、「東洋連盟」に関しては、その主要メンバーが回顧録を残しており、そこで連盟の活動が詳細に記録されている。加えて、連盟が発行していた機関誌『東洋連盟』も、一部欠本があるが、ほぼ全巻入手することができた。一方「カリフ再興団体」については、その運営母体であったアズミー教団の組織運営に関する文書資料と団体の創始者である教団導師の著作や伝記などを入手した。

また上記の当事者たちによる記録に加え、同時期のイギリス外交文書も重要な史料である。当時エジプトを統治していたイギリス当局は、両団体を、反体制的な志向を隠し持つ政治団体とみなして強く警戒し、そのメンバーの行動や団体の活動の監視を続けていたが、ロンドンの国立公文書館での調査を通じてその監視記録文書を入手することができた。

一次史料の収集作業は研究期間を通じて行ったが、この作業と平行して、入手した史料の読解・分析も進めた。初年度は特に「カリフ再興団体」関連史料の分析を行い、その途中経過を日本オリエント学会第 53 回大会で報告した（「学会発表」③）。翌年度は「東洋連盟」に集中して分析を行い、同じくその経過を日本中東学会第 28 回年次大会（「学会発表」②）で報告した。

４．研究成果

本研究課題の取り組みを通じて、「カリフ再興団体」と「東洋連盟」の実態解明を行い、またその歴史的背景の考察を行った。以下団体ごとに明らかになった特徴を説明したうえで、今後の展望を述べたい。

（1）ナイル渓谷・カリフ再興団体

この団体は 1924 年のオスマン帝国カリフ廃位を受けて、アズミー教団導師のムハンマド・マーディー・アブル・アザーイムが、新カリフの選出運動を展開するために結成した団体である。そして実際アブル・アザーイムはこの団体を率いて、カリフ選出のための国際会議の運営や参加など活発な活動を行ったことも明らかとなっている。本研究を通じて、この団体の結成やその活動の背景に、アブル・アザーイム個人の政治的行動主義と、彼が導師を務めるアズミー教団の組織的革新性があったことが明らかとなった。

アブル・アザーイムは一貫して反英の立場を取り、またそのために積極的な政治活動を行っていた。彼は他にも多くの政治団体を結成し、またしばしば他の急進的な民族主義団体やイスラーム主義団体ともつながりを持っていた。カリフ再興団体の結成は、民族主義やイスラーム主義といった相異なるイデオロギー掲げつつも、イギリスからの完全な独立を訴える点では共通の目標を掲げた反帝国主義運動の潮流の一環として理解することができる。

またアズミー教団は新しい教団であり、恐らくは 19 世紀末のスーフィー教団改革運動の影響を受け、旧来の教団には見られない集権的な組織性を備えた教団であった。またこの教団を母体とした慈善団体も作られていたが、こうした慈善団体は教団が社会参加を果たすための一種の媒体としての役割を果

たしたと見なすことができる。そしてこの文脈からは、カリフ再興団体は教団の政治参加のための組織としての役割を担ったと解釈することができる。

(2) 東洋連盟

この団体は、1922 年に、バクリー教団の導師であり、また当時エジプトのスーフィー教団を統括する立場にあったアブドゥル・ハミード・バクリーを団長として結成された団体である。東洋連盟は東洋の諸国民の文化的連帯を掲げ、非政治的・非宗教的な活動を行う文化団体を自らを位置付けていた。実際にこの団体には、エジプト人ムスリム知識人を主体としつつも、キリスト教徒や、あるいは他のアラブ地域やイラン、トルコなどからもその趣旨に賛同する知識人たちが参加し、参加者たちの宗教的・政治的スタンスも多様であった。また、この団体はその活動期間を通じて、エジプト国内外の様々な紛争に調停の申し出や人道支援という形で介入した。ただし、「東洋の連帯」という理念を掲げる一方で、実際にこの団体が関わったのはもっぱらイスラーム世界内部の紛争に限られていた。

本研究では、この団体の非政治性・非宗教性に着目しながら、その結成の歴史的背景と、その活動の政治的・社会的意義について分析を行った。その結果、この団体は特定の宗教的・政治的目的を掲げ、それに賛同する人々がその目的のために活動するという志向性を持った団体ではなく、逆にそれは様々な政治的・宗教的立場に立つ知識人や政治家たちの間の人的なコネクションを築く「サロン」であり、またムスリム諸勢力間の紛争を穏便に解決する「調停の場」としての機能を担った（あるいは担おうと試みた）団体であると結論付けた。

また調停の場としての機能は、ウラマーやスーフィーたちがオスマン時代から開いてきたサロンが果たしてきた機能とも言えるものであり、東洋連盟はそれを文化団体という形で継承したものであったとも考えられる。その点で、この東洋連盟は、組織的革新性を持つアザミー教団の「カリフ再興団体」とは逆に、スーフィーたちの伝統的な役割を保持した団体であったとみなすこともできる。

(3) 今後の展望

本研究課題の取り組みを通じて、「カリフ再興団体」と「東洋連盟」の組織的な実態をある程度明らかにし、またその結成の政治的・社会的文脈、そしてその歴史的な意義の検討を行うことができた。この時期のスーフィーたちの政治参加の具体的な事例を提示するという本研究課題の目的は達成されたと言えるだろう。

今後の課題としては、まず組織面だけでなく、思想面からスーフィズムと政治運動との関係を明らかにする必要がある。特にアズミー教団は、その組織性に加えて、思想的な革新性が見られたことが過去の研究で指摘されているが、本研究ではこれを十分に検討することができなかった。

また同じく思想面では、この時期のパン＝イスラーム主義思想そのものの新たな理解の必要性が、研究活動を通じて痛感された。これは特に東洋連盟の活動を思想的な側面から解釈しようと試みた際に直面した問題である。東洋連盟の社会的・政治的な機能が、実質的にはムスリム諸勢力間の調停者という役割にあったことはすでに述べたが、理念上はこの団体は「イスラーム世界」ではなく「東洋」という枠組みを設定し、そこには日本や中国といった非イスラーム地域も含まれていたのである。また、実現はされなかったものの、史料からは団体がこうした非イスラーム地域での活動も計画していたことが明らかになっている。本研究ではこの点についても深く追求することはできなかった。

以上の課題から、今後は思想面からの分析を加えてさらなる研究に取り組んでゆきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）

①高橋圭「スーフィズムの知と実践の変容―エジプトの事例から」研究会「近代・イスラームの比較教育社会史」（人間文化研究機構（NIHU）プログラム「イスラーム地域研究」東洋文庫拠点・科学研究費補助金基盤研究（C)「オスマン帝国における教育の連続性と変化（19 世紀～20 世紀初頭」（代表者：秋葉淳（千葉大学)）、2012 年 12 月 9 日、東洋文庫

②高橋圭「近代エジプトにおける知的交流の場―東洋連盟の事例から」日本中東学会第 28 回年次大会、2012 年 5 月 13 日、東洋大学

③高橋圭「20 世紀前半のエジプト社会とスーフィズム―タリーカ系諸団体の活動から」日本オリエント学会第 53 回大会、2011 年 11 月 20 日、ノートルダム清心女子大学

〔図書〕（計１件）

①高橋圭（部分担当)、明石書店、『現代エジプトを知るための 60 章』2012 年、172-176 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

高橋　圭（TAKAHASHI KEI）

上智大学・イスラーム研究センター・研究員
研究者番号：60449080

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし